

敬う心を

一宮市立丹陽中学校二年

杉山 舞音花

私は、以前から福祉活動に興味があり、夏休みにある福祉活動に応募しました。

活動当日、私は少し緊張していましたが、施設の職員の人たちは、優しく出迎えてくださり、私に丁寧に介護についての説明などをしてくれました。

施設にいる人は、高齢者で、認知症を患っていたり、足が悪くて歩けなかったりする人など、さまざまな病気を患っている人が、この施設に通っているということを教えてくださいました。

次にお話をされたことが、私の中でとても印象に残りました。それは、「認知症の方は、何回も同じことを言ったり、変なことを話し出したりすることがあります。でもそのときに『この話、二回目ですよ。』などと、おかしなところを指摘するようなことを言わないようにしてくださいね。」

というお話です。職員の方によると、「間違いを指摘された認知症の人は、ショックを受けてしまうので、例え同じ話や変な話をしていても、それをしっかりと聞いてあげることが大切ですよ。」

と、間違いを指摘することが正しい接し方とは限らず、心遣いが大切とのことでした。そのとき私の頭の中にハッとあることがよみがえりました。私の亡くなったおじいちゃんのことを思い出したのです。

私が小学四年生のある日、私のおじいちゃんはお風呂で倒れ、検査をすると、脳梗塞だとわかりました。以来、おじいちゃんは変わってしまいました。それまでは、児童養護施設の先生をしていて、いつも頭の中は養護施設の子供たちのことを考えていました。算数も得意で、私にたくさんの問題集を作って教えてくれるなど、いつも太陽のように明るく元氣いっぱい、優しいおじいちゃんでした。でも、倒れてからというもの、足が動かなくなっていき、どんどん話すことがあやふやになっていきました。ときには、自分の年齢を二十歳や九十歳など、本当の年齢と違うことを言い出すことがあって、私はその度に、「違うよ」と言い、本当の年齢を教えていました。

でも、そのときのおじいちゃんは、何とも言えない表情をしていたのを覚えています。

私の何気ない一言や、私の一方的な想いで、おじいちゃんを傷つけていたのではないかと、ハッと、そのことがよみがえったのです。

もう一度、自分の立場に置き換えて、職員さんが言った言葉を心の中で呼び起こしました。

「同じ話や変な話をしていたとしても、それをしっかりと聞くことが大切です。」

「おかしいところを指摘するようなことを言っただけじゃないですよ。」心の中で響くこの言葉。そうか私は、おじいちゃんの気持ちも考えず、相手の立場になっていなかったのだと、改めて気づかされたのでした。

本当の年齢を言えば思い出してくれるだろう。おじいちゃんはいつか必ず元のように戻ってくれるだろうと。

でもそれは、ただ私の一方的な願望だったのです。そのときのおじいちゃんの病気の状態から目を背けていて、本当の意味で認めていなかったのではないかと。認めることが怖かったのではないかと今になって思います。

相手の状態をしっかりと受け入れて、そして相手に合わせていくこと。

これこそが、相手を思い、相手を尊重する気持ちなんだと思ったのです。そんなおじいちゃんは、小学五年生の夏に、天国に行きました。おじいちゃんにしてあげられなかったことや、あのとき、こんな言葉をかけてあげられていたら……。と、そんなことを考えていたら、後悔の想いがぐっと込み上げてきました。

でも、この後悔する気持ちがあるからこそ、今回の福祉活動で出会った職員さんの言葉や、接し方を重く受け止めることができたように思います。

福祉活動や私のおじいちゃんとの経験を通して思うことは、相手の状態を知ることの大切さと、そして一方的な想いではなく、相手の気持ちに寄り添う心の重要さです。

人はいつまでも健康ではられません。会話も思うようにできなくなったり、体も思うように動かせなくなったり、私たちはいずれ、一人で生きていくことが困難になります。人は、人の支えの中で生きていくことを、福祉活動を通して、改めて思い知らされました。私は今後も、相手の気持ちに寄り添っているかどうか、相手を尊重しているかどうか、温かく人に手を差し伸べていける人になれるよう、向き合い続けていきたいと思えます。

